

認知症コラム



認知症の方の家族の話 岸正晴氏 Vol.3



よこすか若年認知症の会タンポポ代表であり、認知症の方の家族でもある岸正晴氏に話を伺いました。

【認知症を受け入れるということ】

認知症の人との関わり方で一番大切なのは“受容”。でも、無理して受け入れなくていい。その人にどのような症状が出ていてどう辛いのか理解する、それが分かれば100%正解です。その理解の積み重ねが受容になります。

私も、お世話をするのが辛くなり、妻に強く当たってしまったことがあります。その時、「私は何も悪いことはしていない。なんであなたにそんなこと言われなくちゃいけないの。」と涙ながらに言われました。その時、「この人はこういう風に困っている」と思って、困っていることを理解しようと思いました。そうして、今ある妻を理解して付き合っていかなければならない、と考え方を変えた時に色々な事がやりやすくなりました。

【最期は私の腕の中で】

それからは、妻も私のことを受け入れ、一緒に散歩に出てくれたり色々なことができました。二人で笑って過ごすことができ、改めて夫婦だと感じられました。

しかし、時間とともに、妻は口から食べられなくなっていく。そんな妻の姿は、「これ以上延命措置はやめて」と言っているように感じました。口を綿棒で濡らしながら語り掛ける日々。最期は家族全員に見守られて、穏やかに私の胸の中で息を引き取りました。あのまま認知症にならなければ、私は仕事ばかりで妻をここまで大切にできていなかったと思います。認知症になったからこそ、歩幅を合わせて一緒に歩いてくることが出来ました。

【認知症であることをオープンにできる町へ】

色々ありましたが、私の活動の支えになっているのは、認知症の人や家族と関わること。認知症の人のお世話を経験した家族だからこそ分かることがたくさんあるし、アドバイスもできる。認知症の人をお世話していくうえで、家族同士のつながりは大きい。これからも、認知症の本人だけでなく、その家族も支え続けていきたいです。

そしていつか、認知症の本人や家族がスーパーの横で買い物袋を下げて自然に話せるような日が来てほしいです。認知症の家族が集まった場で泣きながら気持ちを打ち明けなくても、その辺で気軽に話せる町。本人も家族も臆することなく認知症と言える社会になればいいなと思います。

問い合わせ先:健康長寿課 介護予防係 (046-822-8135)